

座 談 会 II

テーマ：これからの小児保健活動に求められること

司 会 玉那覇 榮 一 (沖縄県小児保健協会会長)

出席者 鎌 田 佐多子 (沖縄女子短期大学児童教育学科教授)

伊 集 京 美 (与那原町役場健康保険課課長)

井 村 弘 子 (沖縄国際大学総合文化学部人間福祉学科准教授)

田 仲 由紀子 (沖縄子育て情報ういず代表)

森 川 武 (港川学童クラブ学童指導員)



鎌 田 佐多子



伊 集 京 美



井 村 弘 子



田 仲 由紀子



森 川 武



玉那覇 榮 一

■玉那覇 私ども沖縄県小児保健協会は、創立 35 周年を迎えまして、去年 12 月に記念式典と会館の披露パーティーを行いました。記念事業の 1 つとして、この座談会が企画されました。35 年経過して新しい活動拠点である沖縄小児保健センターが完成したことを機会に、新しい活動の方向性を見つけて、新たに地域活動、沖縄の子どものためになるようなことがあればやっていきたいということで、今日皆様にお集まりいただきました。

ここに今日お集まりの方は県内で、子どもに関わる仕事を各方面で活動をしているということでは共通です。その共通面を活かして、ぜひ私たち小児保健協会の今後の活動に新たな示唆を与えて下さい。忌憚ない意見、要望も含めて、こういうことをしたらいいじゃないかとかをざっくばらんにぜひ聞かせていただきたいと思います。

それではまず自己紹介ですが、鎌田佐多子先生からお話を伺いたいと思います。

■鎌田 私は沖縄女子短期大学で、保育士や幼稚園・小学校の教員を養成する大学で、明日の母親・父親予備軍の学生たちと付き合っています。今回保育所保育指針・幼稚園教育要領・小学校の学習指導要領が改訂されましたが、その背景として 1 つ目は今の子どもたちは直接経験が乏しい、不足していること、2 つ目に生活のリズムが乱れていること、3 つ目にコミュニケーション力が低下してきたことなどが指摘されています。つまり「生きる力」の基礎につながるものが幼児期から乏しくなってきたということなのです。沖縄も同様の課題を抱えていると思われませんが、私は子どものころと身体の確かな育ちに向けた子どもの文化環境の面からお話が出来ればと思います。

■玉那覇 ありがとうございます。鎌田佐多子先生は、保育士養成とか幼稚園教育に長らく携わってきた方ですので、沖縄のすみずみまで教え子がおりまして、私も県の家庭教育相談事業で、ご一

緒に県内の離島回りなどしますと、どこに行っても先生の教え子がいらして、いろいろご相談にあずかったことがたくさんありました。また、昨年からは沖縄県教育委員に就任されて、ご活躍されて、今後そういう面で何かやりたいこととかがございましたら一言お願いできますか。

■鎌田 直接経験が不足しているということは何かということ、コミュニケーション力が希薄になってきたことと大いに関係があるといわれています。子どもたちが積極的に人と関わる力を身につけていくためにも幼児期からもっと「群れて遊ぶ」直接体験や絵本や語りを通して「感動する」間接体験を大事にしたいと思います。やはりこころの健康、身体は親がその子と丁寧に向き合っていて育てていることが大切だと思います。乳幼児期に、そういう親意識がもう少し高まるような子育て環境・親支援環境があればと思うんですね。読み聞かせのボランティアが今小学校などでも活躍していますが、「読み聞かせ」や「語り」の行為は実は、それを行う親や大人自身が子育て力の一つにつながっていることを痛感しています。

■玉那覇 ありがとうございます。続きまして現場の自治体、与那原町で長い間、保健師としての活動のほか行政的な面でも訪問活動をされている伊集京美さんに、現在の母子保健、小児保健というものをどういうふうにしるのかということを含めてお話を伺いたいと思います。

■伊集 取り敢えず、私の方からは、まず与那原町の母子保健活動の紹介をできたらいいのかなと思っていますので、そこをちょっとお話をさせていただきます。先ほどいただいたように与那原町に採用されて約 22 年、その頃は私も新米保健師ということでしたので保健師の教育のなかでいつも言われる、その地域の健康課題って何だろうということが活動のスタートなんですね。その時に一緒

だった駐在保健師さんと一緒に、「与那原町の健康課題というか、母子に関する健康課題というのは何だろうね」、「行政というところはこの健康課題を変えていくにはどうした活動をしたらいいのかなあ」というところに話がいく、それが保健師の健康づくりの流れみたいなものになっていて、その頃から小児保健協会さんの力を借りて実施していた乳児健診があり、そこから子どもたちの健康課題が見えてくるというところがあって、一番与那原町で大きな課題であったのが、あの頃は虫歯だったんですよ。子どもたちの虫歯ということの健康課題があって、そこをどう解決していくかというところから私の母子保健活動が始まったような気がします。

その時にお母さんに対してまず虫歯の恐さとか、そういったことを教育していかないと、子どもたちが健康と思えないということを健診の中でお母さんたちへお話をさせてもらい、多分与那原町が県内では初めてだったと思うんですけども、2歳児歯科健診ということを実施してきました。1歳半健診では虫歯はないけど、3歳になった途端に虫歯が急に増えるという沖縄県の特徴があったも

のですから、1歳半から3歳児の間をどうするかというところで、与那原町はそこに2歳児歯科健診を実施、これも保健所の歯科の先生のお力を借りて、ぜひお願いしますということで与那原に来てもらって2歳児歯科健診を実施しました。そこでまたお母さんたちに会う機会が増えてくるわけですから、お母さんたちといろいろお話をさせてもらいながら、その他の健診をすすめていくと。それが定着して行って、少しずつ虫歯は改善したかなと思っているんですね。

そんなふう子どもたちの健康づくりを実施していく。保健というのは二十何年ぐらいやってようやく効果が出て来る。そんな形で、まずは母子保健活動は健診でどういうお母さんたちの健康課題があるのかな、子どもたちの健康課題があるのかなという視点で健診活動を進め、どういうふうに取り組んでいこうかということを考えることが大事ということです。そこで、最近特に気になっているのが、子どもたちの肥満という問題があるかなと。というのが妊婦の方たちの肥満の課題で、そのお母さんたちから生まれてくる子どもたちが未熟児じゃないけど低体重の課題、その後小学校



に上がる頃には少し肥満傾向にあるという健康課題が気になるところです。そういったことから、お母さんたちと食の問題とかの話ができる場をどこか設定できないかなと今考えているところです。

■玉那覇 伊集さんは、現在は健康保険課長ということですね。だからどうしても介護保険を含め、生活習慣病対策とかそういうのは国の重点施策になっているので、私たちが受託している乳幼児健診とか1歳半健診、3歳児健診などと、つり合いがなかなか難しいかと思いますが、現状ではどうなんでしょうか。

■伊集 そうでもないですよ、生活習慣病の対策って成人期の今課題と言われていますが、例えば、特に女性の方たちの成人期の肥満を見ていると結構妊娠中にいろいろな問題があったりするんですよ。妊娠期をきっかけに生活習慣病になっていたりとかっていうのがあるので、そうすると妊婦健診とか1歳半健診ではお母さんたちはきちんと母子手帳を持ってくる。その時に妊娠中のお母さんの状況を確認することができるのです。成人期の生活習慣病も本当はその妊娠中からの健康づくりが大事なんじゃないかなと。そうなると、この妊娠中の健康づくりをきっちりと体づくりをしていけば、この子の体づくりもできていくというのが最近わかったというか、その成人期のお母さんたちを見ていると、そこは繋がっているなと思いますけど。

■玉那覇 そういう意識で取り組んでいらっしゃると、私たちも非常に心強い限りですね。まあ私たちも大人の生活習慣病の予防は赤ちゃんからと、安次嶺馨先生を先頭に一生懸命取り組んでいるつもりですけども、なかなか一般の理解が進まないで、子どもから成人まで一連のものとして取り組んでいらっしゃるといのは心強いです。

それともう1つは子育て支援とかって、まあ福祉が関わりますよね。お役所というと、この福祉

と保健との連携というのはどうなんでしょう、現場では、協力してやらないと子育て支援というものはうまく機能しないと思うのですが…。

■伊集 そうですね、保健師として体のことをお話していても、お母さんたちとしては、結構子育ての悩みっていうのを保健指導の場面でよく聞きます。そういった時に与那原町の福祉の施策を知っていないと繋がりができないというのがあるので、そういったものはしっかりと情報もきちんと持っているながら、保健指導にあたる。実際そういうお母さんたちというのは地域のことをわからないお母さんたちが悩みを持っていますので、やっぱり寄り添ってというか、ただ「行ってみて」だけではどうしても繋がらないので、「一緒に行ってみようか」というような形での繋ぎ方はぜひ必要なことだなと。そういう意味では福祉との連携というのは大事な部分ですね。

■玉那覇 そうですね、そこが大切ですね。また後でその方も議論があると思います。

井村先生は、現在沖縄国際大学で臨床心理士の養成にあたられているわけですがけれども、以前から臨床心理士として沖縄で活躍されて、子どもたちのこころの問題に長く関わってこられたんですけども、最近のそういう面での動きはいかがでしょう。

■井村 私は心理的な視点から、子どもの健やかなこころの発達、成長に関心を持っています。そして、子どもが育つ家庭や地域の中で、子どもと親御さん、周囲の方々を支えながら繋げていくという役目も心理士として重要だと思っています。

小児保健の領域では、まず、乳幼児健診の場面ですね。身体面の発達については小児科医、保健師、看護師などのスタッフで診ていただき、心理士は心理検査、発達検査、それから心理相談ということで乳幼児健診と一緒に関わらせていただいています。

現在、発達障害についていろいろと話題になっていますが、発達障害というのはかなり幅が広く、発達の部分的な遅れやアンバランス、育てにくさなども含んでいて、多くの場合、特効薬があるというわけではないんです。その子の成長に合わせてながら苦手なところを補いつつ、周りにも理解してもらって子どもの成長を見守っていく。そういう視点が、家庭や保育所・学校で必要になります。ただ、どうしても診断が一人歩きしてしまうと親御さんが必要以上に不安になってしまうこともあります。また、他の子どもと少し違った行動をすることで除け者になったり、理解のない周囲から「だめ」と叱られたりして、どんどん自信を失ってしまう。そういう二次的な傷つき体験が多く見受けられるように思います。そこで、親子の支援が必要になるわけです。

また、多くのお母さんお父さんは子育てを楽しんでいると感じられていますが、なかには子どもと向き合えない親御さん、子どもと向き合うのが辛いという親御さんもいます。発達のアンバランスや育てにくさから子どもと上手く関係が取れないという場合だけでなく、子どもは健やかに成長していても、親御さんが辛さを感じてしまうケースもある。子育てというのは、周りから大切に育てられ、豊かな子ども時代を過ごした人にとっては、とても心地よい体験となるのですが、辛い体験を持っていると、その部分が刺激されて目の前の子どもにうまく向き合えなくなってしまうこともある。子どもにどう接したらいいのかわからなくなったり、自分が子どもだった時の辛い体験が再現されたりというようなことが起こりがちです。そういった親御さんにどんなふうに支援をしていくかということですね。ここをうまく支えていけば、親御さん自身の辛かった体験も含めて乗り越えることができる。だからこそ、親子共々どう乗り越えていくか、それをどう支えていくか、

ということがとても大事だと思っています。

子どもを大切に育てることはもちろん大事ですが、大切にし過ぎてもだめ。過保護に、大人が手出しをしてしまうと、子どもの良い部分が吸い取られてしまうこともあるので、子ども自身の力を信じて、任せて、見守る。そういうことについては、また後でお話したいと思います。

■玉那覇 そうですね、最近私たちは専門家から、発達の問題を抱えている子どもの専門家への紹介が遅いというお叱りを受けたりして、非常に反省しないといけないなと思っています。今、健診で臨床心理士の方に関わっていただいているのは3歳、1歳半前後からなんですけど、本当は乳児期の非常に子育てで悩まれるお母さんの支えになるような場面から関わっていただければ、まあ先ほどのようにどうしてこんなに放置していたのというお叱りを受けなくてすむかなと思っていますが、そういう面で何かご意見ございますでしょうか。



■井村 そうですね、沖縄の乳幼児健診の歴史といますか、小児保健協会が35年前から活動されてきて、沖縄での乳幼児健診のスタートは1948年だとお聞きしました。この前35周年記念式典にご来賓でいらしていた心理の川井先生が、早くから乳幼児健診に関わってくださっていたんですね。沖縄県の乳幼児健診に最初から心理の先生が入っていらしゃったということをお聞きし、私

はとても驚くと同時に感銘を受けました。沖縄では最初から健診の場に心理相談がセットされ、当時から今まで何年間もそのようなシステムが続いてきたわけです。ただ、その健診システムが現代の社会の中でよりよく機能していくためのあり方については、今後の課題だと思います。

小児保健センターには診察室や検査室もありますし、子どもさんを観察できるような遊びのスペースも完備されていますよね。例えば、発達障害などの診断を受けた子どもさんの定期的なフォローアップの場所としても、ここは十分機能できるという期待を持っています。

■玉那覇 先生は、現在小児保健協会の理事でありますので、その辺は提案していただいて、有効利用をしていただければと思います。

次に、田仲由紀子さんは長らく、沖縄子育て情報「ういず」の代表者として、多方面で母親としての発言をしてこられました。小児保健協会は、乳幼児健診をはじめ諸事業をやっていますけれども、なかなか子育て支援という面では、後手後手に回っている。実際は体の健康面での相談というのは二次的なもので、本当は、子育てで非常にどの母親も負担に感じていることへの援助が大切だと思うんですね。楽しく子育てしましょうと日頃は思っていますが、辛いこともいっぱいあるし、そういう面での支援ということでは非常に足りなかったとも思います。そういうことで現在の田仲さんの活動を通して何かございましたらよろしくお願いします。

■田仲 今私は皆さんがお話くださった観点とはちょっと違うところから子育て支援活動をスタートしています。「ういず」の活動を始めて10年になります。その前は14年間IT企業でシステムエンジニアとして忙しい仕事をしていました。残業があたり前という職場で子育てをしながら、仕事もちゃんとしたいし、子育てもちゃんとしたい



という思いが強く、例えば子どもを寝かす時は絵本の読み聞かせもしたし、離乳食もすごく頑張って作っていましたが、自分がすごく疲れてギリギリの状態になっていく。仕事も子育てもうまくできない、これ以上は頑張れないと、そんな形で仕事を辞めて、「ういず」を立ち上げたんです。だから私のスタートは子育てが上手くできなかったという状態からのスタートで、「頑張りすぎない」というところから入っているんです。

今、「ういず」のホームページの掲示板にはいろいろな書き込みがありますが、最近私が感じているのは、親が二極分化してきているということです。本当に何も子どものことをしない親と、それから頑張り過ぎて疲れている親。先ほど鎌田先生もおっしゃっているんですけど、幼児期の心の健康、身体を健康を担っているのは親で、親といっても、やっぱりどうしても母親に偏っていて、そのなかでお母さんが自分の子育てに不安を感じているというのが今の現状だと思うんです。そういう、もういっぱいいっぱいのお母さんたちにどう支援してあげたらいいんだろうなというのを、常に考えていて、「もっとリラックスしていいよ」というメッセージや情報を発信しています。身体的には、お母さんがリラックスできる場所の情報や、子連れで行きやすい食べ物屋さんの情報などを紹介しています。

それから去年の2月から新たに始めたのがカナ

ダの親支援プログラム、ノーバディーズ・パーフェクト (Nobody's Perfect) です。日本語に訳すると「完璧な親なんていない」というものなんです。そのファシリテーター養成講座を沖縄県ではじめて「ういず」が企画、開催しました。同期で卒業した人が12名、ファシリテーターを取りまして、今年の終わりぐらいからノーバディーズ・パーフェクトのプログラムを実施しているのですが、このプログラムは「完璧じゃなくていいんだよ、あなたは一生懸命やっているんだから」と、お母さんを認めることからスタートしています。「ういず」は昨年食育講座も行ないましたが、それもやっぱり頑張りが過ぎない食育、上手な手の抜き方みたいな、常にそういう形をとってきているんです。

ただ、今持っている課題としては、問題を抱えているお母さんたちはさっきの話のように健診等にも出てこないと思いますし、「ういず」の掲示板に書き込んでくる人は、パソコンを使える環境とスキルとエネルギーを持っている人ですから、そこに来ない人もたくさん居ます。その人たちにどう情報を伝えて行くかということですね。

それで、今月末から始めようと思っているのが、携帯への子育て情報発信です。パソコンは持っていないなくても携帯は持っているという人は多いので、そういうものをうまく使っていこうと思っています。携帯に届いた子育て情報を見て、「こんな所があるんだ、こんな支援があるんだ、ちょっと外に出てみようかな」とか、思ってもらえたらいいなと思っています。

それと、家にこもっていて外に出て来ないお母さんたちの支援として効果がありそうだと思うのが、「こんにちは赤ちゃん事業」なのですが、私は専門家ではないのでどうしてこうなるのかよくわからないんですが、北谷町で訪問活動をしている保健師さんから聞いた話で、那覇市の訪問事業の

内容を比較したとき、訪問支援者に支払う報酬額が全然違うことがわかりました。とても大事な支援ですし、責任の重い仕事なのにある地域では専門職として、ある地域ではボランティアとして支援するというのはどうなのか。こういう形で本当に必要な支援ができるのか心配しています。

■玉那覇 わかりました、今いみじくも健診に出てくるお母さんはほとんど問題なくて、健診に来ないお母さんが問題を抱えていることが多い、それをどうするかという話まで出てきました。

森川武さんは学童クラブの指導員として長らく活動されて、もう18年ですか。

■森川 そうです、今年4月で18年目です。

■玉那覇 小児保健というと、イメージとして小さい乳幼児とかそれを対象にしているイメージがありますが、実は、大人になりきるまでが私たちの分野だと思っています。けれども、現実には、学童時期になるともう学校の方が主体になってきて、なかなかそこまで目が届かない。そういうことで、長い間学童クラブで活動された森川さん、いかがでしょうか。最近の子どもたちの動きと、それからどういうところが私たちにできることなのか教えていただきたいのですが。



■森川 学童保育の指導員になりまして今年で18年目になるんですけど、もともとは大阪の出身でして、18年前に沖縄に来たときに、たまたまこの

## 座談会Ⅱ

学童クラブの指導員を、最初は夏休みにアルバイトをしないかというので、気軽に「いいですよ」ということで行なったのです。

その時にびっくりしたのは、子どもがほとんど遊びを知らないということです。鬼ごっことか、かくれんぼとか、そういう単純な遊びはわかるんですけど、例えばエスケンとか、泥警とか、ドボンとか、缶けりもそうですけど、そういうちょっと複雑なルールのある遊びになると全くわからないということがありました。どうしてこうなっているのかわからなくて、沖縄だけかと思っていました。

その次の年の冬に大阪に帰ったとき、大阪の学

童に、皆さんご存じの3つの間といわれている、時間、空間、仲間がなくなった。それプラス、子どもたちが群れて遊ぶということができないので、遊びの伝承がされていないということがわかったんです。

それで沖縄に戻ってきてから、自分が子どもの頃に遊んでいた遊びをどんどんその当時の子どもたちに教えていったんです。「缶けりはこうするんだよとか、エスケンはこうするんだよ」とか。自分がいわばガキ大将みたいな形になってどんどん教えていって、本来の、子どもが子ども同士で遊びを教える形になるまで。これは5～6年かかっ



童クラブを訪ねて行って、20年ぐらい指導員をなさっている方にそういう話をしたら、沖縄だけじゃない、全国的にそうだと言われたんです。一つは、遊びの伝承が途切れていること。それはなぜかという、高度成長期時代の60年代あたりからそれがだんだん崩れてきた。遊び場がなくなった。空間ですね。それと、授業時間も増えたりして学校にいる時間が長くなったり、また、学校が終わった後の放課後の習い事とか、塾とかに行くようになって遊ぶ時間がなくなってきた。それから、遊ぶ仲間がいない。少子化もあるんですけど、子どもが忙しくなってきた、遊ぶにも塾があるから遊べない、何々があるから遊べないというので、結局2人、3人の少人数でしか遊べない。このよ

たんです。その時はまだ一番上の子が3年生で、あとは2年生、1年生でした。低学年だったので、その子たちが高学年になってからやっと自分たち指導員が教えなくても、「これはこうやって」とか、「次はあそこに進んでいい」、「この線を踏んだらだめだよ」とか、子ども同士で集まって遊びを教えるようになって、やっと本来の、昔の遊ぶ時代の形になったなと思っています。

そういうふう子ども同士が群れて遊ぶことによって、先ほど鎌田先生もおっしゃっていましたが、やっぱり直接体験のところがコミュニケーションのきっかけとなるんです。まずは遊ぶのに、「みんな集まれ」と人を集めるところから始めなければ遊びも成立しない。遊んでいる時にはイン



チキをした者と正義感の強い子がぶつかり合ったり、力の弱い子がやられたりしたら上の子が「どうしたの」とちゃんと言葉かけをすとか、そういう人間関係の基礎的なものが遊びの世界に全部詰まっているんじゃないかと思うのです。だからそういう経験がとっても大事じゃないかなと、この仕事をしていて感じてきたのです。

だから自分たち指導員も、何かあってもすぐに「どうした」と入るんじゃなくて、なるべく子どもたちに任せて、こちら辺でいいかなというよっぼどのところで、「どうした」と入っています。やっぱり子ども同士で解決すとか、子ども同士で話し合いをして何かを達成すとか、そういう力をつけていくには、コミュニケーションを作る、子どもが群れで遊ぶ、群れで何かするというのは非常に大事じゃないかと思うんです。

それから、自分は小児保健センターについては正直言って全然知りませんでした。学童クラブは1年生から6年生の子どもたちなんですけど、その前は幼稚園なり、保育園なり、乳幼児なんですよ。ここ10年近く前からちょっと気になる1年生とか、幼稚園児が学童でも目立ち始めました。最初は何故かなと思っていたんですけど、やっぱり乳幼児の時の育ちなんですよ。それがしっかりしているか、ちょっとあやふやかということで、幼稚園、1年生になっても、全然落ち着きがないとか、すごく神経質になっているとか、そういうのがあります。もちろんその子の育ちの経過なんですけど、結局は保護者、親の考え方、価値観によって違ってきているなど。

一番思うのは、学童を必要とする親は共働きか一人親家庭の所なので、保育園を経験しているんですが、その保育園の保育方針によって子どもの動きが違ふんです。外遊びを中心にやっている保育園出身の子どもは、学童に来て自分でも自分で遊ぶんです。自分で遊びを見つけたり、自分で遊びを考

えたり。また、学習的なことを中心にしている保育園から来た子というのは、知識は相当あるんです。「これはこうでしょう」とか「かけ算言えるよ」と話すけど、遊びとなったら、「何して遊んでいいの」と必ず聞いてきますし、必ず、「ねえ、ねえ、一緒に遊ぼう」と、大人がいなければ遊べない。なかには土も触れない、虫も触れない子どももいます。あるお母さんが、土で遊んでいる子どもを見て、「この子は大丈夫ですか」と言うから、自分は「お母さんが大丈夫ですか」と言いたくなります。親の価値観も大分変わってきていると感じています。

今全国的にその傾向がありまして、先ほど田仲さんもおっしゃいましたけど、自分が行なっている子育てが本当にこれでいいのだろうか、こういうやり方でいいのだろうか、情報があまりにも多すぎてどれで行なえばいいのかわからない。だから子どもにあれもやらせこれもやらせと、小さいころからたくさんやらせる親や、反対に何もさせない放ったらかしの親もいます。

自分が大切だと思っているのは外遊びなんです。ところがのびのびと外遊びができる場が不足しているような気がするんです。公園で遊ぶにしても砂場は汚いとか、木登りも禁止でできないので、公園の遊具で遊ぶことしかできない。もっと、子どもがやりたい遊びをのびのびとできないかという思いをもったお母さんたちや、子どもを遊ばせ自主保育しているお母さんたちが、公園の一角を借りまして、行政と住民が一体となって、冒険遊び場（プレーパーク）を造りました。そこは子どもがのびのびと好きな遊びができるのです。穴を掘ってもいいし、水遊びをしてもいいし、たき火をしてもいいし、木登りもいいし、基地を作ってもいい、何でもできます。冒険遊び場（プレーパーク）のモットーは「自分の責任で自由に遊ぶ」ということです。

この「自分の責任で自由に遊ぶ」というのは、

子どもに対する言葉ではないです。親に対するものです。親がそういう意識を持って、「自分の責任で自由に遊ばせる場所ですよ、それを理解して子どもを遊ばせてください」と。だから、ここでケガしたり何かしても、それは親の責任。親がそれを理解してそこで子どもを遊ばせているということ。乳幼児や小学生で、自分の責任で遊びなさいと言ってもわかりませんよね。だから、自分はそこにすごく共感しまして、今浦添の伊祖公園でプレーパークを行なっています。

最初は小学生たちがたくさん遊んでいたんですけど、ここ最近では乳幼児、乳飲み子を抱えたお母さんとか2～3歳のお子さんを連れて遊びに来てくれるんです。たき火をしたり、たき火の煙を感じたり、小学生の子が「この虫触ってみる？」と言って触らせてあげたりとか、そういうふうに子ども同士触れ合いができる。そういう五感を通した遊びをプレーパークでは展開しているので、これからもっとこういう遊びを展開していきたいと思っています。

**■玉那覇** ありがとうございます。これで一通り発言していただきましたが、これからはパネラー同士も自由に話し合ってください。

では、鎌田先生、先ほど森川さんが、大きくなって子ども同士の関わりが持てないとか、うまく遊ばない子の元をたどると、どうも小さい時に乳児期からの母と子の関係なりに何か問題があるのではないかという示唆に富んだ言葉がありました。先生は、絵本の読み語りの活動を随分長くされていて、お子さんのことについても詳しいようなので、沖縄ではどういうふうなルートで活動しているのでしょうか。

**■鎌田** これまでの話で共通するのは、乳幼児期の親子関係が課題としてあるのではないかということです。今の親たちの二極化現象から安定して子育てをしている親はそれでいいんですが、自律

していけますから…そうでない不安定で疲れている親たちにどう出会い接していくか、そういう具体的な方法など私も日常的な課題として持っています。子どもを産んではじめて「親」となるわけですが親になるまで、つまり出産までの背景はそれぞれ多様でも子どもを産んだ母親は本能的にわが子を抱きますよね。抱きしめて目を見つめます。その親と子の関係は双方にとって心やすらぐ瞬間といわれます。親と子が1対1で向き合う、そこには親と子の絆が築かれていく関係の芽も育つといわれます。



乳幼児期に親や大人が子どもとしっかり向き合い信頼関係を築いていくのに絵本の読み語りは、有効だと言われています。今、乳児を持つ親にそれを知らせ広めていこうという活動が国内でも広がっています。「ブックスタート」という活動です。

ブックスタートとは「赤ちゃんとお母さん（保護者）に絵本を開く楽しい体験と一緒に絵本を手渡しこころ触れあうひとときを持つきっかけを作る」活動といわれています。

那覇市でも「ブックスタート」の活動を乳幼児健診のときに取り入れています。集団健診で受診に来る親子を対象にボランティアの方々が絵本の読み聞かせを行い、一人ひとりの親に読み聞かせのすばらしさを伝えさらに健診会場で数冊の絵本の中から1冊選んでその親子にプレゼントしてい

ます。ブックスタート事業に参加するボランティアは事前に乳幼児期の発達や読み聞かせの意義、赤ちゃん絵本の特徴・絵本の選択・読み聞かせのポイントなど研修を受けています。乳児期からわが子に絵本を読み聞かせる子育ての方法が定着している親も増えてきているようです。読み聞かせはもちろん子どもにとっては言葉の獲得、感動体験など大きなメリットがたくさんありますが、私は先ほども申し上げましたが、すぐれた絵本を親が読み聞かせることは、親にとっても心が和むことを多くの親から聞いています。

赤ちゃん向けの絵本は絵を見るだけでも何かしら癒しになるんですね。これも少し聞き取り調査を行なったときの例ですが、感情的に高ぶっていた親が絵本を取り、1ページ1ページめくっている間に落ち着いてきたということもあります。

こういうことを聞くと乳児期からの絵本の読み聞かせは親にとっても精神的に穏やかになる要素を持っているということを感じました。今日の座談会のテーマでもあります「これからの小児保健活動に求められること」といったとき、集団健診のとき、親の精神的な面からの事業として、例えば「親も育つ絵本の魅力再発見」のようなメニューを取り入れてはどうか。親にとって絵本は読み聞かせるものにとらえるのではなく育児疲れの親にとっても心和むものであること、癒しとして親がまずそれを受け入れるということも気づき、感じる集団健診の場になってもいいのではないかと、そのことは母親の育ちの一滴を染み込ませていくことにもつながるのではないかと思います。ブックスタート事業が乳児健診事業と連携し各市町村で実施されていくことを願っていますが、現実はそのに伴う予算の壁で多くの市町村が足踏み状態です。予算がないから…と、そこであきらめるのではなく、企業からは協力金を、本屋さんからは良い本の献本、地域はボランティアの人材をと、

県民も行政に依存するだけではなく自分たちも動くことも大事だと思います。

今後小児保健協会も活動の一環として親子が育つ「ブックスタート」事業の導入を検討していただけたらと思います。

■玉那覇 大変、貴重な発言をいただきました。

伊集さんは行政を離れて、お金がなければなかりに工夫して、例えば、ボランティアがこういうところでは大いに役立つと思いますね。市町村としてもそういうのをやりたいけれども財政的に難しいということであれば、やはりボランティアという、そういう人たちを養成するというのは小児保健協会の活動の中に受け入れてもいいかなと考えておりますけれど、市町村においてはこういうふうを考えていますか。

■伊集 与那原町では以前にそれを行ないたいと、教育委員会の方とのタイアップでスタートしようとしたんですけど、ブックスタートというのは絵本をプレゼントというのもひとつで、これが多分予算の壁だったと思います。ボランティアは結構集まります。その中で活動して、今も保母さんたちのOBが来て、健診とかの会場で読み聞かせは行なってもらっています。ただ本を配ることがブックスタートでは、まず一つのポイントというのも聞いていたので、そこが今できていないところで、今鎌田先生のお話を聞きながら、「ああそうか、企業とか募ってそういった方法もあるんだな」と思って、いろいろな方法で取り組めるんだなということで参考になりました。

少し話を変えてというか、そういうことでブックスタートの方法なんだなと思ったんですけど、先ほどから皆さんの話を聞いて行政としてちょっと気になったところが、健診に来ないお母さんたちをどう取り込むかということは本当に見落としていたところかなと思います。そういうことがあって、与那原町は、母子手帳をもらいにお母さ

んたちは確実に来る。そこで必ず会えるというのがあって、去年、一昨年ぐらいから、まずそこを大事にしようということで、全数、必ず母子手帳を配るときにきちんと時間を取ってもらってお話しようという取り組みを行っています。多分行政の方、あちこちスタートしているかなと思っているんですけど。もう一つ与那原町は、生まれたら、全数、行政のスタッフが必ず訪問するというので、保健師が全数2か月児で訪問しています。その流れで4か月までの赤ちゃん訪問を母子保健推進員さんが行なう。だから健診とかに来ないお母さんの顔がすぐ保健師さんが思い浮かぶように最近からなっています。これが小さい市町村のメリットでもあるという話をしたと思うんですけど、与那原町は出生が180名ぐらいなものですから、3人保健師がいれば、約月15名出生の訪問はできるんです。面積的にも小さい所なので、推進員さんが1地区1名いれば、全員お母さんたちがわかるというような状況。

でもそのなかでも、やっぱり若い世代というのがアパート住まいになっていて、顔が見えてこないというところもあって、悩みをうまく聞き出せないというところは出てきているので、そこが課題としてあります。そこをどう連携して、例えば、行政にいる私たちにはちょっとうまく話が聞き出せないことを、そういったいろいろな情報網があるのだよということをしっかりお母さんに伝えていけば、お母さんが選ぶじゃないですか。どこからか情報をもらう。必ず行政でなくていいわけですから、そういったことを伝えられる場としてこういう訪問活動とか、必ず私たちでなくていいんだよ、そういう情報がいっぱいあるよというところを教えられる役になればいいのかなと。ただ今は全数把握はできるんですけど、けどしっかりと悩みが聞きだせているのかとか、困っていることがきちんと把握できているのかなと。それでも健

診に来ない方たちは何でかなというところは、今立ち止まっているところなので、そういったところをうまくいろんな関係機関と結び付ける役ができたらいいのかなと思いつながり聞いていました。

■玉那覇 今あった母親同士のネットワークというのは大切ですよ。行政の関与も、もちろん大切ですけど、その辺の取り組みはどういうふうにしていますか。

■田仲 そうですね、まず、その前に今のお話を聞いて、母子手帳を交付する時に少し時間を取ってもらうというのはすごいいいなと思いました。つい最近、多分その人は宜野湾市在住なんですけど、おめでたになり母子手帳をもらいに行くときに、窓口の人に「おめでとう」と言われるのをとても楽しみに行ったのに、機械的に渡されて、すごく悲しかったという話をしていました。窓口の人に「おめでとうと言ってくれないんですか」と言ったらいいんですが、本当にそういうちょっとした言葉がけを心待ちにしている親もいるんですね。声かけをしないで欲しいと思っている人もいるかもしれませんが、そういう人の方が人との関わりを避けているという意味でハイリスクの可能性もあって、それこそ声かけしてあげた方がいいのに、そのチャンスを逃していると思うんです。

あとは、親同士の情報ネットワークについてです。お母さん達は専門家に相談する前に、先輩ママの話を聞きたいということがあって、「ここに行けば臨床心理士さんと話ができるよ」と教えても、必ずその前に「そこに行ってみてどうでしたか」ということが聞きたいわけです。そういう事が気軽に聞ける場として掲示板があって、「相談に行って良かったよ」とか、「逆に傷つきました」という生の声が入ってきて、そういう情報の中から判断・選んでいきたいという人が多いと思います。逆にそういう情報が得られないと一歩が踏み出せないという事になってしまうので、今伊集さんがおつ



しゃったように、健診会場などでいろいろな情報を提供していくのは大事だと思います。

また、お母さんたちは、専門家に指導されるよりも、「私も同じだったよ」という共感や、「うまくいかなかったときに、こうやったらうまくいったよ」という体験談を聞いたがっているんですね。先ほどお話したノーバディーズ・パーフェクトのプログラムは、6～8回の連続講座ですが、お母さんたちにグループを作ってもらい、参加者中心でプログラムを進めていきます。話し合いたいテーマもお母さんたちに決めてもらって、それぞれが自分の悩みを話したり、こうやったらうまくいったよという話をしていきます。ファシリテーターがちょっと引っぱっていくというやり方をするんですが、プログラムの最終目的はお母さん同士のネットワークを作ってあげることなんです。ファシリテーターがずっとお母さんたちに関わることはできないので、グループを作って、そのお母さんたちがネットワークを作って、お互いに支え合うという環境を作っていくという事があって、だから少人数でしか開催できないんですけど、そういうネットワークが広がっていったらいいな

と思って行なっています。開催にはお金がかかったり、場所の問題があったりと、難しい事もあるんですが、東京では都が主催して開催しています。お母さん同士のネットワークができて、例えば預け先ひとつ取っても、友だち同士で「ちょっと預けていい？」とお願いできる関係ができれば随分楽になってくると思うんですね。小児保健センターでノーバディーズ・パーフェクトのプログラムが実施できたらいいなと思いますし、ノーバディーズ・パーフェクトの普及を小児保健協会に応援してもらえたらなと思います。

■玉那覇 乳幼児健診というのは、土日とかを利用していますが、そこでのネットワーク形成というのはどうなんですか。要するに、皆さんすれ違うわけでしょう。だからその間に同じような年代の子どもをみんな抱えてきますよね。だから共通の話題が多いと思うのですが、健診で相談をして親同士はすぐ帰るだけでいいのか。

■伊集 健診の設定の仕方が、行政、多分どこでも土日に設定しているんですけど、人数が70名とか、50名とかの数でいって、多分そのなかで例えばゆっくりブックスタートでいく那覇市は一生

懸命行なっていて、部屋は個別にしてということであるんですけど、必要なお母さんは多分寄っていくけど、本当に来てほしいお母さんが寄ってってくれるかどうかというところでは、健診の持ち方も行政としては考えないといけないのかなとは思っているんですけどね。これが毎月でもあればもっとゆったりとしてできるだろうなと思ったりもするんですけど、それもまた、スタッフの問題とかいろいろあって…。

■田仲 たしかに、児童館とか、子育て支援センターにはお母さんたちが集まって来ますが、実はそこでの会話が不毛だと思っている人もたくさんいるんですね。悩んでいることはなかなか話せない。支援センターでのお母さん同士の会話というのは、「今日は天気がいいね」とか、「お子さん、大きくなったね」とか、「歩けるようになったんだね」とかという表面的な会話が多い。でも本当はもっと意味のある会話、中身の濃い会話をしたいと思っているので、当たり障りのない会話が疲れるという声もたくさん聞きます。だから、場所を作ればネットワークがつながるかというところでもないと思うのです。ノーバディーズ・パーフェクトの時も、ここでは何をしゃべっても大丈夫だよという関係性を作るところから入るんですけど、それが本当に大事で、そういう関係性ができてようやく話し始めるという感じですね。



■伊集 だから1回、1回の健診でどこまで期待するかというところでは、ただ、一人でも二人でも多くそこでいいものが得られたというのがあるというのはいいことかなと思うので、そういうブックスタートとか、そういう機会を使ってこういうのを紹介するとかというのはいいのかなと思う。そこですべてを期待するということはちょっと難しいかもしれないけど。

■田仲 そうですね、つなげる役目で、こういうのがあるよとか、ノーバディーズ・パーフェクトがあるよとかという情報提供をする。

■伊集 そういう場所として利用するということができるんじゃないか。

■玉那覇 健診の場を利用することも、もっと考えないといけないですね。

森川さんいかがですか、もう少し年齢が上で、学童クラブでお母さん同士、あるいはお父さん同士の交流のきっかけはつかめないですか。

■森川 私の学童クラブでは、お父さん、お母さんたちが運営している共同運営の学童なので、やはりお父さん、お母さんたち同士のコミュニケーションがしっかりできなかつたら運営していけないので、お互いに連絡を取り合ったりとか、月に一度保護者会を持ったりしています。学童に入ってくるまでは全然知らない間柄ですけど、学童に入ってきて、2～3年もすれば家族ぐるみで付き合っているお父さん、お母さんたちもいます。

先ほど田仲さんもおっしゃいましたが、すぐに本音をしゃべるとするのは難しいと思います。学童では月に1度保護者会があります。そこでは子どものことが一番話題になるんですけど、先輩お母さんが新米お母さんに「悩みがある？」と聞いて、「うちの子もそうだったよと、そんなこと気にしなくていいよ」というようなアドバイスをしてもらって、新米お母さんは安心したという話も聞きました。

あとお父さんなんですけど、これは10年以上前の話ですけど、子育てとか家事は全部女がやるものだという考えのお父さんがいたんです。そのお父さんの親もそういう親だったからそういうふうに思っていて、学童に入るまで、家事、子育ては全部お母さん任せだったんです。

学童に入ってきたときに保護者会があって、お母さんがどうしても仕事が抜けられずに、お父さんは仕方なく来たんです。私の学童は保護者会にお父さんも結構参加するのでお父さんも何人かいたんですね。保護者会が終わってからひとりのお父さんが、「〇〇さんも飲みに行かない？」と誘ったんです。そのお父さんも好きな方だから、「じゃあ行きましょうか」一緒に行きました。そうして飲みに行ったお父さんたちの会話なんですけど、「〇〇さんの息子さんは1年何組ですか」と聞いたら、自分の子どものクラスを、そのお父さんはわからないんです。そしたら、違うお父さんが「〇〇君は2組だよ」と言うので、なぜ自分が知らないのに、ほかのお父さんが自分の子どものクラスを知っているんだろうとびっくりしたんですね。そのお父さんたちは、「料理は作らないけど後片づけぐらいするよ」とか、「料理は週に1回は作るよ」とか、「子どもとこの前釣りに行っておもしろかったよ」とかお父さん同士が話すのを聞いて、その人はすごくカルチャーショックを受けたんです。夜中の2時半ぐらいまで飲んでいたんですけど、それから家に帰ってそのお父さんは寝ているお母さんを起こして、「今こういう話を聞いてきたんだけどびっくりした。ほかのお父さんがこんなに子育てに関わっていることを初めて知った」と話すと、お母さんが、「実はお父さんに手伝ってほしいことはいっぱいあったんだけど、言ってもやってくれないからということで諦めて、私ノイローゼみたいになって、ここにハゲがあるんだよ」と、お母さんは円形脱毛症になっていたんですね。それを聞

いていてそのお父さんは「すまなかった。自分のできるところから始めるから、学童のことは全部俺がする」といって、学童2年目から副会長になって、そのお父さんは結局11年間学童にいたんですけど、副会長をずっと行ない、最後の年に会長を行なってくれました。後から入ってきたお父さんお母さんたちに、子どもはこうやって育ちますからとかアドバイスをしない、積極的に親と親をつなげてくれたり、子どもを中心に学童を盛り上げてくれました。子どもの話ができるというのがとってもいいコミュニケーションとなります。また少しアルコールが入るとうちとけやすくなりますね。今もそうですけど、結構お父さんが学童のために頑張ってくれています。

■玉那覇 なるほどね、円形脱毛症の例など井村先生いかがですか。

■井村 鎌田先生のお話の中で印象に残ったことがあります。「ブックスタート」のことなのですが、読み聞かせが子どもには大切、という話はよく聞きますけど、それがお母さんにとっても癒しになるというところが、私はとっても新鮮な感じがして、なるほどと思いました。

自分が新米の母親だった頃を振り返って見たとき、健診の通知を受け取ると、一応行ってはいましたけど、行く前にちょっと緊張感があるんですね。自分の子どもがきちんと育っているかどうか、何か自分が試されているような、親の検査みたいな感じで少し緊張する。ましてや、いろいろ気になることがあればあるほど、何か言われたら嫌だし、健診に行くのがちょっとしんどくなると思います。健診に対してそんな気持ちになるのは残念なことですよ。

でも、あそこに行くとか何かいいことがあるよ、というような情報が伝わる。健診に行くとプレゼントがもらえるとか、ちょっとお得感みたいなものがきっかけになれば、行ってみようかなと思う

んではないでしょうか。実際に健診会場で「ブックスタート」に触れ、子ども向けの本を読み聞かせてもらったり、自分で開いて目を通してみたりすると親自身がとてもいい時間を過ごせたという体験は、親御さんにとって健診への大きなきっかけになると思いました。

それから、健診に行っていない親御さんの場合、「こんにちは赤ちゃん事業」などの訪問支援でも、玄関先でのやりとりがぎくしゃくしたり、閉ざされてしまったりするような場合も多いと聞いています。そこで、「ブックスタート」の絵本を持って訪ねて行き、「これをお届けに来たんです」というような形で訪問させていただければ、その後の展開もずいぶん変わってくるのかなと、何かそんな希望の持てるチャンスにつながるのではないかなという感じがいたしました。

■鎌田 私は最初に申しあげました保育士や幼稚園の教員を養成する職場にいますが、義務教育がスタートする前の6か年間にいろいろな機関が連携して親が親であることの安定と喜びを感じていけるような親育ち支援ですね。そういうことにもっと力を入れられないかなと思います。学童期・青年期になると、親子関係は、さらに難しくなるわけでしょう。ですから親も親として成長していくために「親に出会う場」にいる人たち、例えば産婦人科、小児科、保育所、幼稚園等で新たな視点で何か取り組んでいけないか、もちろん田仲さんや森川さんのような個人サイドでのすばらしい親支援活動もありますが、親同士が集い気軽に自由にゆんたくしたくなる場の環境を提供していくことも大事なかなと、皆さんの話を聞きながら思いました。小児保健センターもそういう活動の場として開放していけるといいですね。

大人も今、人間関係を築くことが希薄になっているといわれますが、本音が語れない、本音を語らない親たちも度重なる交わりの中で本音を語り

合えるところまで変容していくとその場所を自分たちの居場所として活用し、時には運営していくわけですよ。そこからやがて地域のリーダーとして新たな活動を展開していく。自主的に育てているそんな親たちに接したりするとやっぱり新たな視点から親育ち支援のあり方をとらえることも大事なかなと思います。

■玉那覇 先ほどから、私たちは乳幼児健診の受診率が低いと嘆いていますけれども、実際は努力が足りない状況ですね。やっぱり健診とかという構えて来る。そこへもっと気安く、行ったらいいことがあるというふうに思わせるような、その中の一つとして、ブックスタートの活動もあるだろうし、ほかに親同士の関わり合いを持つ場に何とかできればなというふうに考えております。

これで大体話も出尽くしてきた感じですが、最後に締めくくりとして、小児保健協会に望むこと、ということで、私たち今度のメインテーマが「すべての子どもに生きる力と夢みる心を」ということでこの座談会も開いているわけですが、そこで一言ずつで結構ですけど、今後小児保健協会にこういうことを期待したいということがございましたら、よろしくお願ひしたいと思います。今度は森川さんの方からお願いします。

■森川 今自分も小児健診の受診率が低いということを知り、自分行ったらあたりまえだと思っていたので、そんなに低いんだというので実はちょっとびっくりしました。自分の子どもを診てもらって、順調ですよ、この辺は心配ですよねといっって発見してもらえるんだったらすごくいいじゃないかなと思うんですけど、今先生がおっしゃったように、自分が試されているようだという、そういう雰囲気もあるのかな、そういうふう思う人もいるんだなと思ったら、やっぱり親の方から変えていかなければいけないのかなというふうに感じました。



一つは、地域の方でそういう声かけを行なったりとか、コミュニティとしてそういうところを作らなければいけないんじゃないかなと思うんです。今浦添の場合もそうですけど、自治会への加入率も低いようなんですが、やはりもっと自治会の方で関わってもらい、それぞれ地域の方で活性化していかなければいけないんですけど、そういうコミュニティができると、自然とおばあちゃんや、おばさんや、若いお母さん方も一緒になって何か行なう。その時に同じ地域に住んでいるから顔見知りになって、そこでこういうふうに健診に行った方がいいよとか、いついつあるよとか、そういう情報交換もできると思います。自治会とか地域でこれから小児保健センターが行なっていく活動の発信ができるような形にできないかなと思います。

今自分が行なっているプレーパークもそうなんですけど、プレーパークも同じく地域の住民と行政が一緒になって行なっていくように少しずつですけど進めています。しかし、子どもを持っている親御さんたちは関心を示すんですけど、それ以外の人はあまり関心を示しません。でも、やはりこういうことをしていく上で発信していく必要はあるんじゃないか。そこで小さな冊子を出したりとか、パンフレットを出したりとか、たまにはマスコミをお願いして記事にしてもらったりとかしているんですけど、そういうことを小児保健センターの方でも行なっていくのも一つの手段じゃないかなと感じました。

それから、日本冒険遊び協会というのがあります。現在協会では、乳幼児健診のときに、乳幼児を対象にしたプレーパークの奨励とか、パンフレットを配布したりしています。また、乳幼児健診をする場所にもよるんですけど、例えばその場所の横が公園だったら、その健診をする日だけ公園の一部をプレーパークとして提供してもらって、

そこで親子でプレーパークを楽しめるというようなことをしている所もあると聞きました。絵本と一緒に読んだり、読み聞かせを聞いて、「心地いいな、外でこうやって聞くのもいいな、外で読むのもいいな」とか、そういう自然の光を浴びて、草木が揺れる音を聞いてリラックスできる場も必要じゃないかなと思います。また、あるプレーパークでは、子どもたちが遊んでいる間にカフェを作って、たき火でお湯を沸かしてコーヒーやお茶を飲みながらお母さんたちはそこでいろいろな情報交換など行ないゆっくり話をしていると聞きました。自分としてはこの小児保健センターと一緒にプレーパークカフェを行なってみたいです。もしできるんでしたら惜しみなく協力させていただきますので、よろしくお願いします。

■玉那覇 それでは田仲さん、いいことばかりじゃなくて、厳しい注文でもいいですよ。

■田仲 今皆さんから出された意見に集約されるとと思います。健診に来た時に、健診だけじゃな



くて、いろいろな情報発信だったり、絵本の読み聞かせだったり、プレーパークだったり、行って楽しそうというのが一緒にあるといいのかなと。

私はプレーパークが大好きで、私の近くでも行なってもらいたいというので森川さんに手伝ってもらった事があるのですが、実際に行なうのはすごく難しかったです。行政の理解を得るのも大変。浦添は火を起こしてもオーケーなんですけど、那

覇はなかなかオーケーが出なかったり。

ノーバディーズ・パーフェクトにしても、プレーパークにしても引っ張っていく人が必要で、地域の中でリーダーを育てようとしても那覇だと子ども会もなければ自治会もないという地域も多くかなり難しい。ですので、この機関を使ってそういう人達を育てていくというのもいいのではないかと思います。

■玉那覇 井村先生、いかがですか。

■井村 乳幼児健診では心理相談の分野でいろいろ連携できる場所があると思います。それから、先ほど申し上げましたけれど、育ちの気になる子のフォローアップというような形で、このセンターの活用ができるかなというふうに思いました。

また、保育園などを巡回しながら親御さんや保育士さんのご相談をお受けするような事業が実現できるといいなと思っています。例えば、保健師と心理士がチームを組んで巡回相談を行う。保育士さんがちょっと気になると思っているような子どもさんについて、遊びの場面を観察させていただきながら、親御さんも交えて一緒に今後の支援を考えていくというようなことができると思います。これからは、ここから出かけて行く、大切なことを積極的に伝えて行くという、そういう姿勢が求められているような感じがいたしました。

■玉那覇 ありがとうございます。伊集さんいかがですか。

■伊集 乳幼児健診を利用してと先ほどお話があったんですけど、行政側からするとつい「お金がかかる」となる場所なんですけど、こういう活動している方たちがいっぱいいるんだと、そこと連携をして内地の方でも行なっているということを知って、そういうことであれば、私たち健診を行なっているけど、お母さんともう少し話をしたいんだけど急いで帰るとか、制約があってすぐ帰ろうとしている。でもここで子どもたちがそこ

ら辺で遊んでいる中でしっかりと、ゆっくりとお母さんたちとお話をしたり、親とお話ができる時間が持てるということが可能になるのかなと。そういう意味では、いろいろな所と連携すれば何もお金もかからずに健診の魅力みたいなものが作れるのかなと思います。

ただ、それを行なうにも、やっぱりもう少しゆとりのある健診を行なうためにも、少し回数を増やさないといけないのかなと思いつつ、そこはやっぱり小児科の先生とか、その辺のスタッフに協力してもらわないといけないので、それが小児保健協会として可能なのかなと思いつつ今ちょっと聞いていたところです。

やっぱり行政としてはお金がかからずに、どんなふうにも魅力ある健診とか、魅力ある保健活動ができるのかなというのがいつもありますので、そこがいろいろな活動をしている皆さんと手を取り合えばできるのかなというのを今日ここに参加して良かったかなと思います。そういう意味でプレーパークみたいなものも、与那原町の健診会場を見てもらえれば、道を挟んで隣ではあるんですけども大きな公園があるんですよ。そこを利用すれば何とかできるのかなと思いつつ聞いていたんですけど、そういった連携を作ってもらえる小児保健協会の活動があればいいかなと。先ほど言ったファシリテーターを育ててもらって、そういう人をここにどんどん紹介してもらえば、こういう健診ができるよというのを小児保健協会さんの方からどんどん提案してもらいたいなと思いました。

■玉那覇 ありがとうございます。では最後に鎌田先生いかがですか。

■鎌田 乳幼児健診をさらに魅力あるものに…「行きたくなる乳幼児健診」にするため、アイデアを医療機関以外の声も参考に検討してはどうか。

本来の集団健診の内容に「楽しかった」「感動した」と思えるプログラムを加えることも受診率を高める工夫の1つになると思います。たとえば父親だけを対象にしたもの、第1子の親を対象、就労・非就労別等会場で多様なプログラムを準備する一方で子どもたちには例えば琉球大学・沖縄キリスト教短期大学・沖縄女子短期大学の児童文化研究クラブの学生たちの出しものを、見せるのです。また、地域で人形劇・エプロンシアターなどサークル活動をしているお母さんたちにもボランティアで協力してもらいます。もちろん栄養指導・保健指導など本来の事業を実施しながらもできるだけ足を運んだ親たちにいろいろな体験・経験が得られるプログラムを用意するということです。

そのためには地域の多様な人材の協力も必要になってくると思います。健診事業に自分たちもその一役を担っている。そんな自覚で参加する人が増えると、地域と共に育つ小児保健活動につながっていくと思います。

最後に皆さんのお手元に配りました資料を見ていただけますか。

平成13年に子どもの読書活動の推進に関する法律が制定されたのです。この法律は18歳以下の子どもを対象としています。日本の子どもたちの読書力の低下に危機を感じてつくられました。すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動ができるようになるために国や県、市町村が積極的にその環境を整備しなければならない、と第2条でうたっています。さらにこの法律で子どもの読書の日も制定しています。

4月23日は「子どもの読書の日」です。小児保健協会でも本を介して子どもの心身の健康を考えてみる取り組みをしてみたいと思います。

集団健診のときのボランティアによる読み聞かせ、保健師の個別訪問の折の絵本紹介等もこの法律の「環境整備に務める」ことの一環です。

今後は私たちが子どもの文化活動の面から小児保健協会と連携を深め地域の親子育ち支援に努めていけたらと思います。



■玉那覇 ありがとうございます。今日は本当にお忙しい中を、今回の私たちのメインテーマ「すべての子どもに生きる力と夢みる心を」ということでこの座談会に参加していただき、いろいろなご意見、それから要望をいただきました。ここで感じたことは、私たちのほかにも、いろいろな分野で子どもに関わる活動をされて、非常に生き生きと幸せを感じながら汗をかいている方がたくさんいるんだということがよくわかりました。1つの組織、団体でできることは限られていますが、県内では、子どもに関わる活動をされている方は沢山います。そういった人たちと連携をとって、ここでもネットワークですね。連携を取りながら、これを私たちの今後の協会の活動に活かしていきたい、具体化したいと思っています。本日はありがとうございます。

